



Red Hat Subscription Management 2023

Red Hat サブスクリプション管理ワークフローの 紹介

お客様の環境に最適なサブスクリプション管理のワークフローを見つけて活用

Red Hat Subscription Management 2023 Red Hat サブスクリプション管理ワークフローの紹介

お客様の環境に最適なサブスクリプション管理のワークフローを見つけて活用

法律上の通知

Copyright © 2023 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

Red Hat Subscription Management ツールおよびアプリケーションには、システムレベルと組織レベルの通知およびステータスをさまざまな方法で表示できます。個別の顧客環境に対応するワークフローが複数あり、どのワークフローを使用するかを把握するには、各ワークフローを理解することが最適です。

目次

| | |
|--|----------|
| 第1章 RED HAT 製品を使用する際のワークフローの理解 | 3 |
| 1.1. RED HAT サブスクリプション管理の紹介 | 3 |
| 第2章 RED HAT サブスクリプション管理で利用可能なツールとアプリケーション | 4 |
| 2.1. RED HAT SUBSCRIPTION MANAGER | 4 |
| 第3章 サブスクリプションワークフローの管理 | 5 |
| 3.1. 使用する適切なワークフローの計画 | 5 |
| 3.2. カスタマーポータル: 自動アタッチシステム | 6 |
| 3.3. カスタマーポータル: 登録および手動サブスクリプション | 7 |
| 3.4. ファーストブートによる登録の理解 | 8 |
| 3.5. キックスタートによるサブスクリプションの登録について | 8 |
| 3.6. ハイパーバイザーとゲストのアタッチサブスクリプションの理解 | 9 |
| 3.7. 切断されたシステムの登録を理解 | 10 |

第1章 RED HAT 製品を使用する際のワークフローの理解

システムを Red Hat サブスクリプション管理に登録する前に、アクティブなサブスクリプションと利用可能なエンタイトルメントが必要です。サブスクリプションは、Red Hat ストアから購入することも、営業担当者に直接問い合わせることにより、サブスクリプションを購入することもできます。

1. サブスクリプションサービスのインベントリーにシステムが登録されます。これは、サブスクリプションサービスがサーバーを管理し、サブスクリプションをアタッチできることを意味します。
2. サブスクリプションがシステムにアタッチされている
3. サブスクリプションが有効である限り、システムはコンテンツデリバリーネットワークからソフトウェアパッケージと更新をダウンロードする

サブスクリプションサービスの各要素は一意に識別するようする必要があります。これにより、システム、製品、およびサブスクリプションの間に真の関係を築くことができます。サブスクリプションサービスは、これらの証明書を生成し、ローカルシステムにインストールします。

- システムのアイデンティティ証明書です。これは、システムが定期的にサブスクリプションサービスを認証し、更新を確認するのに使用されます。システムの登録時に作成されます。
- システムにインストールされている各製品の製品証明書です。Red Hat の各製品には、識別用の証明書があります(ただし、これはシステムに固有のものではありません)。本製品をインストールする際に、システムにインストールされます。
- システムに接続された各サブスクリプションのサブスクリプション証明書。これには、インベントリーからのサブスクリプションに関する情報が含まれます。これは、サブスクリプションがシステムに添付されたときにシステムにインストールされます。



注記

サブスクリプションをアタッチしても、実際にはインストールや更新は行われません。ソフトウェアパッケージ自体は、yum のような通常のシステムツールで管理されています。製品がインストールされていても、適切なサブスクリプションがシステムに接続されているわけではありません。システムは、製品のインストールに有効な証明書を必要としません。

サブスクリプション管理は、より良い情報を提供し、管理者がインフラストラクチャーをより良く制御できるようにします。

1.1. RED HAT サブスクリプション管理の紹介

Red Hat サブスクリプション管理は、お客様の組織が購入した Red Hat 製品と、その製品がインストールされたシステムを追跡します。サブスクリプション管理は、利用可能な製品サブスクリプションと、それらのサブスクリプションが割り当てられているビジネスのインフラストラクチャーの要素との関係を確立します。

第2章 RED HAT サブスクリプション管理で利用可能なツールとアプリケーション

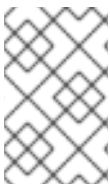
すべての Red Hat Enterprise Linux サブスクリプションには、サブスクリプション設定を管理するためのいくつかのツールが自動的に含まれています。

- ローカルシステムを管理する Red Hat Subscription Manager クライアントツール
- カスタマーポータルでの Red Hat サブスクリプション管理は、カスタマーポータルを通じて単一アカウントのシステムおよびサブスクリプションアプリケーション組織をグローバルに管理します。
- 定期的にチェックインできないシステムのオンプレミスソリューションとしての Red Hat Satellite

多様なツールが用意されているため、管理者は組織のビジネスとインフラストラクチャーの両方の要求に合ったワークフローを作成することができます。

2.1. RED HAT SUBSCRIPTION MANAGER

登録とサブスクリプションの両方は、Red Hat Subscription Manager と呼ばれる UI および CLI ツールを通じてローカルシステムで管理されます。Subscription Manager は、ローカルシステムで利用可能なサブスクリプションと、ローカルシステムで消費されたサブスクリプションを追跡し、表示します。Subscription Manager は、サブスクリプションサービスへの導線として機能し、利用可能な製品の数量やサブスクリプションの有効期限、更新などの変更を同期させます。



注記

Red Hat Subscription Manager ツールは、システムへの変更の性質上、常に root で実行されます。しかし、Red Hat Subscription Manager は、サブスクリプションサービスのユーザーアカウントとしてサブスクリプションサービスに接続します。

Subscription Manager は、システムの登録とサブスクリプションの両方を処理します。Subscription Manager は、コンテンツと更新を設定するためのファーストブートプロセスの一部ですが、システムは Red Hat Subscription Manager の UI または CLI を通じていつでも登録できます。新しいサブスクリプション、新製品、および更新は、Red Hat Subscription Manager ツールを使用して表示し、システムに適用することができます。

Red Hat Subscription Manager には、ローカルマシンを管理するための UI ベースのクライアントと、上級ユーザー向けの CLI クライアント (他のアプリケーションとの連携や、マシンのキックスタートなどの管理作業のスクリプトに使用できる) の 2 つのツールがセットになっています。

これらのツールにより、管理者は、マシンの登録、システムへのサブスクリプションの割り当て (アタッチ)、認証に必要な証明書の更新という、サブスクリプションの管理に直接関係する 3 つの主要な作業を行うことができます。システムファクトの更新など、いくつかのマイナーな操作は、利用可能なサブスクリプションの表示や追跡に役立ちます。

2.1.1. Red Hat Subscription Manager の起動

- Red Hat Enterprise Linux 7 では、Subscription Manager は上部管理バーの **System Tools > Administration** メニューからアクセスできます。
- Red Hat Enterprise Linux 8 では、Subscription Manager は上部管理バーの **Activities > Show All Programs** メニューからアクセスできます。

第3章 サブスクリプションワークフローの管理

システムにはさまざまな種類があり、システムを設定する方法もさまざまです。サブスクリプションサーバーとコンテンツプロバイダーの基本的なコンセプトは、特殊なタイプのシステムや異なるインフラストラクチャーのセットアップに対応できる柔軟性を備えています。

3.1. 使用する適切なワークフローの計画

サブスクリプションサービスおよびコンテンツサービスは連動しています。システム上のローカル Red Hat Subscription Manager クライアントは、サブスクリプションサービスとコンテンツ配信サービスを識別する必要があります。これらは、ホスト型サービス、ローカル管理型サービスの両方、またはその混合となります。

すべてのサブスクリプションとコンテンツのデータは、Red Hat に帰属します。デフォルトでは、すべての Red Hat Enterprise Linux システムが Red Hat ホストサービスを指すように設定されています。管理者がサブスクリプションやコンテンツの管理にオンプレミスのサーバーを使用する場合には、そのオンプレミスのサーバーはまず Red Hat ホストサービスから情報を取得し、次にローカルシステムを管理します。Red Hat のサブスクリプションインベントリは、オンプレミスのサブスクリプションアプリケーションを認識しますが、サブスクリプションアプリケーションが管理するいかなるローカルシステムも認識しません。

Red Hat Subscription Manager の設定では、サブスクリプションサーバーとコンテンツサーバーの2つのサーバーを指しています。この2つの設定は(独立して)変更することができ、サポートされている任意のサブスクリプションサーバーまたはコンテンツサーバーを使用することができます。

表3.1 ソース別のサブスクリプションおよびコンテンツサービス

| サブスクリプションサービス | サブスクリプションサービスへの対応 | コンテンツ配信サービスへの対応 | 推奨環境タイプ |
|---------------------------------|-------------------|-----------------|---|
| カスタマーポータルでの Red Hat サブスクリプション管理 | はい | はい | サブスクリプションやコンテンツ更新のためのスクリプトが不要 |
| Red Hat Satellite 6 | はい | はい | ホストサービスを排除するセキュリティールールを持つビジネス、カスタムコンテンツとデプロイメントスクリプト、サブスクリプション/コンテンツ管理に伴うシステム管理 |

注記

ユーザーアカウントは、アクティベーションキーに関連付けられており、アクティベーションキーを利用するために使用されますが、どのユーザーアカウントを使用するかは、キーの発行者によって異なります。キーがベンダーによって作成された場合は、ベンダーもそのキーを使用するユーザーアカウントを定義し、キーが Red Hat によって発行された場合は Red Hat も定義します。ローカルの IT 部門が Subscription Asset Manager を使用して作成したアクティベーションキーの場合は、関連する Subscription Asset Manager のユーザーアカウントを使用する必要があります。

3.2. カスタマーポータル: 自動アタッチシステム

Red Hat Enterprise Linux システムのサブスクリプション管理には、システムをサブスクリプションサービスに登録してから、そのシステムにインストールされたオペレーティングシステムや製品にサブスクリプションを適用するという2つのステップがあります。デフォルトでは、システム上の Red Hat Subscription Manager ユーザーインターフェイスまたは firstboot を通じてサブスクリプションをシステムにアタッチする際に、これらの2つのステップが同時に実行されます。

Red Hat Subscription Manager の設定は、任意のサブスクリプションサーバーまたはコンテンツサーバーを参照できます。デフォルトでは、Red Hat のホスティングサービスを指します。

そのため、デフォルトの設定を使用すると、システムはカスタマーポータルサブスクリプション管理ホストサービスに登録され、利用可能なサブスクリプションの中から最適なものが自動的にシステムに添付されます。

3.2.1. カスタマーポータルでサブスクリプションを自動装着するための環境

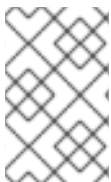
ホスティングサービスは、簡単にデプロイできることが最も重要視される IT 環境のために設計されています。小規模な企業や、Linux インフラの規模が小さい企業が対象です。

- 20 台以下の Linux サーバー
- システム保守のための IT リソースが限られている
- カスタムサブスクリプションやコンテンツユーティリティを作成する必要はありません。

ホスティングサービスを利用することで、少数のマシンの管理が容易になります。

- デフォルトのシステム設定を利用するため導入が容易
- ソフトウェアやハードウェアの追加費用が不要
- 後日、組織の設定に応じて、オンプレミスのサブスクリプション / コンテンツサービスに移行することが可能
- システムが異なるデータセンターや地理的な場所にあっても、すべてのシステムで同じサブスクリプションサービスを利用可能

ホスティングサービスには、ネットワーク全体のパフォーマンスに関する潜在的な問題があります。IT インフラストラクチャーが拡大すると、多数のシステムがコンテンツを取得したり更新を受信しようとする場合、ローカルの帯域幅や遅延の問題が発生する可能性があります。



注記

小規模な IT 環境では、最初は Red Hat のホステッドサービスを利用していても、将来的にはオンプレミスのサブスクリプションサービスやコンテンツサービスを利用するように拡張することができます。

3.2.2. カスタマーポータルでサブスクリプションを自動的にアタッチ

一致したサブスクリプションを自動的にアタッチする場合 (Red Hat Subscription Manager UI のデフォルト設定または subscription-manager コマンドの --auto-attach)、登録プロセスには1つのステップしかありません。

3.2.3. カスタマーポータルでのサブスクリプションの自動アタッチに関するオプションおよび詳細

ほとんどのオプションは、登録後に設定可能な設定設定です。

- 追加のサブスクリプションをアタッチします。これは、ファーストブート時にシステムが自動でアタッチされる場合は、サブスクリプションがオペレーティングシステムに対してのみアタッチされる場合に特に有効です。
- システムファクトを上書きすること。これは、互換性のあるサブスクリプションを見つけるために、オートアタッチおよびヒーリングプロセスがシステムアーキテクチャーおよびハードウェアを判断するために使用されます。
- サービスレベルの優先順位を設定する (これは登録時にも行うことができ、サブスクリプションを選択する際の優先順位の1つとして使用されます)。
- リリースの優先順位を設定することで、そのリリースバージョンを対象としたソフトウェアの更新のみを行い、それ以降の OS バージョンへのアップグレードは無視することができます。
- 関連する yum リポジトリを有効にしたり無効にしたりします。

3.3. カスタマーポータル: 登録および手動サブスクリプション

システム登録とサブスクリプションは1つのステップ (オートアタッチ) で行うことができますが、これらは別々の設定領域です。つまり、それぞれのステップを別々に実行できるため、システムのプロビジョニングやサブスクリプションの割り当てをより細かく制御することができます。

オートアタッチでは、システムのアーキテクチャーや現在インストールされている製品に最適なサブスクリプションが自動的にアタッチされます。これは場合によっては制限されることもあります。たとえば、ファーストブート時に登録すると、他の製品がまだインストールされていないため、オペレーティングシステムのサブスクリプションのみが登録されます。また、システムにインストールされてはいませんが、すぐにインストールされる予定の製品や、32 ビットシステム用に記載されているパッケージが 64 ビットシステムで実行される場合もあります。

いずれの場合も、どのサブスクリプションを含めるかを通知する設定がシステム上にないため、自動アタッチプロセスは目的のサブスクリプションを検出できません。

登録とサブスクリプションのプロセスを分けることで、管理者はサブスクリプションを手動で選択し、システムに登録することができます。

3.3.1. カスタマーポータルでサブスクリプションを手動でアタッチするための環境

登録してから手動でサブスクリプションを適用するには、システムが Red Hat のホストサービスを使用する必要があります。

特に小規模な企業や Linux システムの数が少ないインフラストラクチャーでは、ホスティングサービスを利用するメリットがあります。オートアタッチプロセスと同様に、ホステッドサービスを使用すると、デフォルトのシステム設定を使用し、IT スタッフによるメンテナンスを必要としないため、管理オーバーヘッドを最小限に抑えることができます。

3.3.2. カスタマーポータルでのサブスクリプションの手動アタッチ

手順

1. 登録するシステムで Subscription Manager を開きます。

2. **Available Subscriptions** タブを選択します。
3. システムにアタッチするサブスクリプションを選択します。



注記

コマンドラインインターフェイスを使用してシステムを登録するには、カスタマーポータル認証情報とともに `subscription-manager register` コマンドを入力します。

3.3.3. カスタマーポータルにサブスクリプションを手動でアタッチするためのオプションおよび詳細

ほとんどのオプションは、登録後に設定可能な設定設定です。

- サービスレベルの優先順位を設定する (これは登録時にも行うことができ、サブスクリプションを選択する際の優先順位の1つとして使用されます)。
- リリースの優先順位を設定することで、そのリリースバージョンを対象としたソフトウェアの更新のみを行い、それ以降の OS バージョンへのアップグレードは無視することができます。
- 関連する yum リポジトリを有効にしたり無効にしたりします。

3.4. ファーストブートによる登録の理解

ファーストブート時のシステムの登録は、後で Red Hat Subscription Manager を使用してシステムを登録するのと同じで、それに関連する特別なワークフローはありません。ファーストブートについて言及する主な理由は、`firstboot` ウィザードがサブスクリプションやコンテンツの更新のためにシステムを設定するいくつかの異なる方法を提供するからです。システムには最初の設定時から必ず何らかのサブスクリプションの設定があり、それらのオプションを理解することで、後々の管理が容易になります。

ファーストブート時には、**ソフトウェア更新の設定** 画面で、サブスクリプションサービスと割り当てられたサブスクリプションが設定されます。選択肢は3つあります。

- Red Hat Subscription Management
- Red Hat Satellite
- 後で登録

デフォルトでは、ファーストブートはシステムをカスタマーポータルのサブスクリプション管理に登録し、互換性のあるサブスクリプションを自動登録します。Skip Automatic Subscription チェックボックスを選択すると、自動サブスクリプションが無効になり、システムでサブスクリプションを手動で割り当てることができます。

コンテンツサーバーを設定するためのファーストブートオプションは、Red Hat Subscription Manager を使用して既存のシステムを設定する場合と同じです。

3.5. キックスタートによるサブスクリプションの登録について

キックスタートは、プロビジョニングシステムの重要なコンポーネントです。サブスクリプションのセットアップは、ポストインストールスクリプトとしてキックスタートの説明書に含めることができます。

キックスタートのセットアップは、ホストされたサービスへの登録、アクティベーションキーを使用した Subscription Asset Manager インスタンスへの登録、手動でのサブスクリプションのアタッチなど、

管理者が使用する任意のワークフローに従うことができます。まず、使用するサブスクリプションのワークフローを確認してから、`subscription-manager` コマンドを使用して必要な各ステップを実行します。

3.5.1. キックスタートを使用してサブスクリプションをアタッチするための環境

キックスタートは、システムの作成をスクリプトで行うため、テスト環境、データセンター、プライベートクラウドなど、日常的にインスタンスの作成および破棄が行われる可能性がある環境で使用されます。

3.5.2. キックスタートを使ったサブスクリプションの取り付け

キックスタートの一部としてシステムを登録し、サブスクリプションを登録するには、インストール後のスクリプトを実行する `subscription-manager` コマンドを実行してください"

```
subscription-manager register --username username --password password --auto-attach
```

この例では、サブスクリプション設定はデフォルト設定で、システムが Red Hat サブスクリプション管理 (ホステッド) システムに登録されていることを意味しています。さらに、`--auto-attach` オプションを使用して、最も適したサブスクリプションをアタッチします。

3.5.3. キックスタートを使用してサブスクリプションをアタッチするためのオプションおよび詳細

キックスタートは、サポートされている設定のいずれにも従うことができますが、環境をセットアップするために最初に追加のポストインストールスクリプトを使用する必要がある場合があります。

- サービスレベルを設定するには、`--servicelevel` オプションを使用します。
- サブスクリプションを手動でアタッチするには、`--auto-attach` オプションをオフにして、`attach` コマンドで2つ目のスクリプトを実行するか、後からサブスクリプションを追加します。
- デフォルトでは、Red Hat Subscription Manager はカスタマーポータルでホストされたサブスクリプションおよびコンテンツサービスを使用します。Subscription Asset Manager のようなオンプレミスのサービスを使用するには、まず `subscription-manager config` コマンドを実行して Red Hat Subscription Manager の設定をリセットし、新しい設定を使用してシステムを登録します。
- アクティベーションキーを使用してシステムを登録し、サブスクリプションを登録するには、まず適切なサブスクリプションサービスを使用するように Red Hat Subscription Manager を設定し、次にアクティベーションキーを使用して登録します。

3.6. ハイパーバイザーとゲストのアタッチサブスクリプションの理解

Red Hat Enterprise Linux には、仮想ホストシステム上のゲストを自動的に検出し、ホストとゲストのマップを作成して、ゲストを仮想システムとして登録することができる任意のサービスがあります。これにより、仮想システムに固有のサブスクリプションをゲストが利用できるようになり、また、ホストから継承されたサブスクリプションがゲストに自動的に適用されるようになります。Virtual Data Center (VDC) サブスクリプションを適用できる、サポート対象の仮想化プラットフォームは以下のとおりです。

- Red Hat Virtualization (RHV)

- Red Hat OpenStack Platform (RHOSP)
- Red Hat Enterprise Linux ハイパーバイザー
- VMware vSphere
- Microsoft Hyper-V



注記

virt-who デーモンは現在、Microsoft System Center 2012 R2 Virtual Machine Manager (SCVMM) をサポートしていません。v が接続する Microsoft Hyper-V ホストごとに virt-who 設定ファイルを用意する必要があります。

3.6.1. ハイパーバイザーとゲストのサブスクリプションをアタッチするための環境

サブスクリプションが効果的に管理されるためには、特に継承可能なサブスクリプションやサブスクリプション間の相互作用において、ホストとゲストの間関係をサブスクリプションサービスが内部で認識する必要があります。これは、ホスト/ゲストのマッピングであり、特定のハイパーバイザーのすべてのゲスト識別子のリストです。

ハイパーバイザーは、Red Hat サブスクリプション管理の特別なタイプのコンシューマーとして登録されています。ハイパーバイザー自体は通常の物理システムとして管理されていますが、ハイパーバイザーの種類によって、その特定のシステムにはゲストがマッピングされ、サブスクリプションが継承されたり、ゲストに対して異なる形で適用されたりすることが示されます。

すべてのゲストを特定のホストに関連付けるホスト/ゲストマッピングにより、サブスクリプションサービスは、インスタンスごとに2つの別々のサブスクリプションを消費するのではなく、1つのサブスクリプションを仮想ホストに適切にアタッチし、(たとえば) そのゲストに含まれて継承されるサブスクリプションを適用することができます。

この関連付けは、各ゲストの普遍的にユニークな識別子を抽出し、それをそのハイパーバイザーと関連付けることで行われます。これらの UUID は、各仮想システムのシステムファクトの一部です。

まずハイパーバイザーが登録され、その後、システム上の関連プロセスがゲストをスキャンし、発見された UUID をサブスクリプションサービスに提出します。これは、ハイパーバイザー上の virt-who プロセスによって行われます。

3.6.2. ハイパーバイザーまたはゲストサブスクリプションの登録

前提条件

virt-who プロセスがゲストを物理的なホストにマッピングし、システムが仮想システムとして適切に登録されるように、仮想ホストまたは環境内のハイパーバイザー (VMware の場合) 上で実行されている必要があります。それ以外の場合は、仮想インスタンスは物理インスタンスとして扱われます。

手順

仮想マシンのハイパーバイザーは、他のシステムと同じ登録プロセスを使用します。

1. コマンドを入力します。

```
# sudo subscription-manager register
```

3.7. 切断されたシステムの登録を理解

切断されたシステムは、システムがオフラインであり、企業ネットワークから外れているか、インターネットに全くアクセスできない可能性があるため、固有のユースケースです。つまり、このシステムにはサブスクリプションやコンテンツサービスにアクセスする機能がないため、システムへの変更はすべて手動で行われる必要があります。

3.7.1. 切断されたシステムを登録するための環境

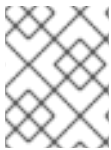
切断されたシステムとは、インターネットや、場合によってはイントラネットにも接続できないシステムのことです。そのシステムのための製品やサブスクリプション、そしてシステム自体も、やはりインベントリーに含めるべきです。

これは、ビジネスルールによってインターネットへの接続が禁止されている安全な場所にあるサーバーを意味することが多くなります。また、バックアップシステムも含まれており、必要になるまでオフラインにしておくこともできます。

サブスクリプションやコンテンツの操作のほとんどは、ネットワーク上で行われます。たとえば、`rhsmcertd` プロセスは、指定された購読サービスに接続して、4時間ごとにサブスクリプション情報の更新をチェックします。システムがインターネットに接続できなければ、これらの管理作業のほとんどを行うことができません。

3.7.2. 切断されたシステムを Red Hat に登録

管理者は、接続が制限されているか、インターネットへのアクセスが一貫性のないシステムに対して、サブスクリプションをアタッチして追跡する場合があります。オフラインまたはエアギャップのシステムを登録するには、カスタマーポータルで Red Hat サブスクリプション管理を使用してシステムプロファイルを手動で作成します。



注記

このプロファイルはプレースホルダーとして機能し、インターネットに再度アクセスするまで実際のシステムに接続されません。

手順

1. **システムプロファイルを作成します。** Red Hat サブスクリプション管理の [systems](#) ページで、New ボタンをクリックします。新しいシステムプロファイルの作成を終了するには、必要な情報を指定します。
2. **サブスクリプションを割り当てます。** 新規作成したシステムプロファイルで、サブスクリプション タブをクリックして、システムで使用するサブスクリプションを割り当てます。
3. **エンタイトルメント証明書をダウンロードしてインポートします。** システムプロファイルの Subscriptions タブから Download Certificates をクリックし、割り当てられたサブスクリプションのエンタイトルメント証明書をダウンロードします。ダウンロードしたファイルは zip 形式になります。コンテンツと `/export/entitlement_certificates/` フォルダーで、`certificate xyz.pem` を展開します。クライアントシステムの `/tmp` ディレクトリに移動します。

```
# subscription-manager import --
certificate=/tmp/Name_Of_Downloaded_Entitlement_Cert.pem
```

3.7.3. 切断されたシステムを登録するためのオプションおよび詳細

サービスレベルの設定のようなシステムレベルの設定も、別のサブスクリプションやコンテンツサービスの使用のようなインフラストラクチャーレベルの設定も、事実上すべての追加設定オプションは、**切**

断されている限り、切断されたシステムには適用されません。オートアタッチなどのほとんどのパラメーターは、ネットワーク上で自動的に行われる操作を設定するものです。

一つは、システムがオンラインになったときに、どのような設定にするかということです。たとえば、インフラストラクチャーの残りの部分がカスタマーポータル Subscription Management ホストサービスではなく Satellite 6 を使用している場合は、切断されたシステムも Red Hat サブスクリプション管理ではなく Satellite 6 サービスに登録する必要があるでしょう。セキュリティールール上、そのシステムがオンラインになることはないため、その設定は常に無意味なものとなります。バックアップシステムは、いつでもオンラインになる可能性があるため、適切な設定が重要になります。